小笠原諸島

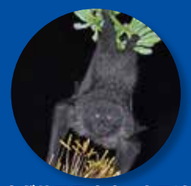
Ogasawara Islands

小笠原諸島は東京から南に約 1,000km 離れた位置にあり、「ボニンブルー」※ とよばれる紺碧の海と切り立った断崖に囲まれた大小 30 ほどの島々からなります。世界遺産の区域となっているのは、聟（むこ）島列島、父島列島、母島列島、北硫黄島、南硫黄島、西之島で、総面積は約 7,900ha です。有人島の父島、母島では、集落を除いた区域と周辺の海域の一部が世界遺産の区域となっています。

※小笠原諸島には 1830 年まで定住者はおらず、「無人島（ボニン・アイランド）」と呼ばれていました。

ボニナイト
海洋プレートの沈み込みが始まって間もない時期にのみ発生する特殊な岩石。小笠原諸島の「ボニンアイランズ」から命名され、世界で最も大規模に露出。

貨幣石
単細胞生物で大型の底生有孔虫の化石。コインに似た形状から命名。



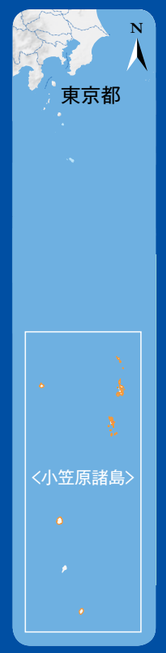
オガサワラオオコウモリ
オオコウモリ科に属する小笠原諸島唯一の固有哺乳類。父島、母島、火山列島に生息が確認される。国の天然記念物。
＊絶滅危惧Ⅰ B類（EN）

ワダンノキ
母島列島の固有種で、樹高 4 ～ 5m にもなるキク科の植物。種分化の過程で草本が木本に進化した植物と考えられている。
＊絶滅危惧Ⅱ類（VU）

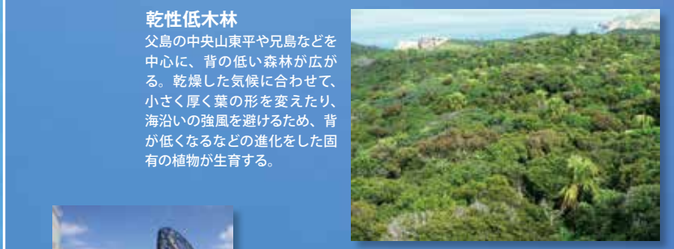
陸産貝類（カタツムリの仲間）
約 100 種の在来種のうち、90%以上が固有種で、固有種率が極めて高く、また、現在も新種の発見が続いている。これらの点が、小笠原諸島が世界遺産として認められる一つの鍵となった。

＊ 環境省版レッドリスト
絶滅危惧Ⅰ A 類（CR）
ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
絶滅危惧Ⅰ B類（EN）
近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧Ⅱ類（VU）
絶滅の危険が増大している種

ホエールウオッチング
近海にはイルカやクジラが 23 種以上確認されている。ザトウクジラは冬から春にかけて、イルカ類やマッコウクジラは年間を通して観察することができる。



世界自然遺産の登録区域

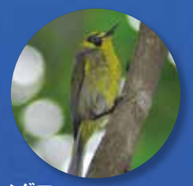


乾性低木林
父島の中央山東平や兄島などを中心に、背の低い森林が広がる。乾燥した気候に合わせて、小さく厚く葉の形を変えたり、海沿いの強風を避けるため、背が低くなるなどの進化をした固有の植物が生育する。

小笠原ビジターセンター
小笠原の自然を中心に、歴史や文化を紹介した施設。捕鯨基地や占領地などとして特異な道を歩んだ歴史や、小笠原にしかいない固有種などの珍しい動植物に関する展示や解説が行われている。1988 年東京都設置。

長崎展望台
「ボニンブルー」と呼ばれる紺碧の海が広がる兄島瀬戸や、兄島などを見渡すことができる。

グリーンアノール柵
グリーンアノールは、オガサワラシジミやトンボ類などの希少種をはじめ昆虫類を捕食する外来種である。母島の新夕日ヶ丘や南崎では、グリーンアノール侵入防止柵で囲った保護区を設置するとともに、柵内で粘着トラップを使って排除を進めており、昆虫類が持続的に生息できる環境を整えている。



メグロ
母島とその属島である向島、妹島の 3 島にのみ生息し、小笠原諸島の陸鳥で唯一の固有種。競争者や捕食者が少ないため森林内の様々な場所を利用している。
＊絶滅危惧Ⅰ B類（EN）

湿性高木林
小笠原が無人島であった時代には、広範囲に分布していたと考えられるが、開拓により減少し、母島など一部地域の湿潤な環境下に見られるのみとなった。樹高 20m に達する背の高い森林が見られ、林冠層は「こぶのき」として親しまれているシマホルトノキ、アカテツなどによって構成されている。材として伐採され、今では希少な種となったオガサワラグワも見られる。

沈水カルスト（南島）
南島一帯や母島の石門一帯では、石灰岩が侵食や風化を受けてできた「カルスト地形」が見られる。南島周辺はカルスト地形が海中に沈降した沈水カルスト地形が見られる国内でも珍しい場所。

アカガシラカラスバト
小笠原群島の森林内に生息する固有亜種。野生化したノネコに捕食されるなどして、その数が減少したが、近年、ノネコ対策等の保全活動により、個体数が回復している。国の天然記念物。
＊絶滅危惧Ⅰ A 類（CR）

ノネコ・ノヤギ柵
父島東平には、希少な固有植物やアカガシラカラスバト等が生息・生育しており、移入種であるノネコやノヤギから守るために柵を作り、柵内への新たな侵入を防ぐとともに、柵内のノネコやノヤギの排除事業が進められている。